

紅葉葉は朝光反し濃く薄く宇野千代生家の庭にちり敷く

(金光紀代子)

この日の情景、風景がきつらりと詠まれています。もみじの葉は朝光をかえす。それも同じ色でなく濃いのも薄いのもあるという作者の発見が一首を成立させている。ひとつの風景もていねいに見ることの大切さを思わせています。

口々に「もみじ最高」笑みこぼれ見送る吾は駐車の係

(安達敏雄)

迎える側の気持らが素直に詠まれています。一期一会の人かも知れませんが、温かいふれあいに笑顔が浮かぶ一首となっています。結句「吾は駐車の係」とだけしか言っていないませんが、ボランティアの人の気持らに読者が寄り添える表現となっています。

【俳句の部】

選評 島津教恵

◎優秀賞

仏頭へ紅葉散り初む千代茶会

(金光清美)

当日の情景と余すところなく詠み、そのにぎわいの中、散り始めた紅葉にほのかを表しむと感じておられるのがいいなと思いました。

◎入選

縁側に千代御座すやに庭小春

(正木紀子)

小春日和の庭、このほっこりとした温みは「ああ千代さんが来て縁側に坐っておられるからだろうな」と気付かれたのですね。季語の「小春」が活きています。